写真とエッセイ

立山・黒部
アルペンルートの旅

高野敦志

黒部峡谷に向かう
立山のふもと室堂へ
雄山に登る
立山黒部アルペンルート
旅の終わりはミュージアム
あとがき

目次

黒部峡谷に向かう
立山のふもと室堂へ
雄山に登る
立山黒部アルペンルート
旅の終わりはミュージアム
あとがき

黒部峡谷に向かう

北陸新幹線が金沢まで開通すれば、都内から富山に出るのも容易になるだろうが、僕が黒部峡谷や立山を目指した一昔前は、北陸へ出るのは便が悪かった。飛行機を使わないなら、いっそ運賃を安くあげようと、単身で夜の池袋、サンシャインシティプリンスホテル前へ急いだ。富山行きの夜行バスに乗るためである。

狭い車内で仮眠するが、すぐに背中が痛くなった。一時間おきにサービスエリアで休憩するのだが、目覚めるたびに、寝ぼけ方がひどくなる。夜が明けた頃には、新潟県内を走っていた。少し眠れたようである。

富山駅に着いたのは五時五十分。いびきみたいな音が臍(へそ)からし

た。コンビニに駆け込み、小腹を満たすことにする。人々はまだ目覚めたばかりなのだろう。グリーンの路面電車は、がらがらのまま走っている。手持ち無沙汰なので、すぐに富山地方鉄道に乗り継いでしまった。

　車両はＪＲから払い下げられた、昔の一等車を思わせる内装である。宇奈月（うなづき）駅に着くと、黒部峡谷鉄道の駅に向かった。九時発のトロッコ列車は、二両の電気機関車で十数両の客車を引いていく。おもちゃのように可愛く、遊園地の乗り物ぐらい窮屈。足を組むこともできない。立ち上がったら頭をぶつけてしまいそうである。これで居眠りでもしようものなら、開いた窓から車外に転げ落ちかねない。

何でこんなに狭いのかと言うと、そもそも黒部ダムを建設するために、関西電力が敷設（ふせつ）した工事用の路線だったからである。旅客に転用された現在でも、「工事」と表示された列車もあり、職員や工具などを専門に運んでいる。

トロッコ列車はのろのろと進んでいく。宇奈月駅を出て、すぐに赤い鉄橋、新山彦橋を渡る。トンネル内部も荒削りのままか、コンクリートを吹き付けた程度。車一台が通れる地下の軌道には、時折、はらはら地下水が落ちてくる。壁面にはところどころ、作業員のための「待避所」があり、列車が通過するのを待てるようになっている。

新柳原発電所は、西洋の城を思わせるモダンな造りである。こ

んな山奥にと、ちょっと意外な気がした。多くの駅は工事用だったり、対向列車がすれ違う信号所だったりで、一般の乗客が途中下車できるのは、黒薙（くろなぎ）と鐘釣（かねつり）のみである。

　柳橋駅の先には、谷の斜面に自然のままで、石像のように見える岩がある。「仏石（ほとけいし）」と呼ばれる岩には、お地蔵さんみたいに前掛けと帽子がつけられている。

　黒薙駅を過ぎると、後曳橋（あとひきばし）を渡るのだが、谷の深さは目もくらむほどである。途中には猫又（ねこまた）という面白い名前の駅がある。鼠（ねずみ）返しの岩壁があり、猫に追われた鼠が後戻りしなければならなかったが、猫もまた先に進めなかったのが地名の由来である。鐘釣駅の方は、それに形が似た鐘釣山があるところから駅名となった。近くの河原では露天風呂が楽しめ、万年雪も目前に見えるという。

トロッコ列車は冬期は運休となるので、線路に沿って地下の歩道が掘られており、吹雪（ふぶき）に遭（あ）わずに職員が歩いて通えるようになっている。中は冷蔵庫のように涼しいという。

終点の欅平（けやきだいら）駅で下車した。工事用の道路を進んでいく。奥鐘橋（おくがねばし）を渡ったあたりで、正面に人喰岩が見えてくる。何とも物騒な名前だが、崖の下がかつての流れにえぐられて、怪物の口のように見えるところから名がついた。すぐ傍（かたわ）らには黒部川支流の砂防ダムがあり、流れ落ちる轟（とどろ）きが窪みに反響し、まるで人喰岩がうなっているように聞こえる。

ここは落石も多く、遊歩道として整備されたわけではないので、石が頭に当たっても、谷へ足を滑らせても、一切保障はしないと

注意書きされている。上ばかり見ていると、足元の方もおぼつかなくなる。しかも、舗装もされていない道路を、工事用のトラックが頻繁に、砂埃（すなぼこり）を立てながら通過する。

　かなり眺めのいい地点もあり、望遠レンズを使えば、渓流のダイナミックな姿がとらえられる。シャッター・スピードを落とせば、時間の流れそのものが写真の中に収められる。途中で道は二つに分かれた。歩行者はトンネルを通るなという標示が見える。暗くて狭い地下でトラックが迫ってきたら、逃げ道がないからである。迂回して山道を行くと、人通りはさらに少なくなったが、この先に何やら温泉があるらしい。

　歩けど歩けど悪路は続く。やがてもう一つトンネルが見えてきた。延長三二〇メートルもある。これを抜ければ祖母谷（ばばだに）温泉に出

るのだという。蛍光灯に照らされており、人が通ってもいいらしいが、車が走ってきたら、やはり恐怖を感じることだろう。
幸いトラックは来なかった。トンネル内はかなりの急坂となっており、上りきった所で地上に出る。ようやく抜けた先には、別世界があった。前方には河原が見えて、流れの彼方には鉄橋が架かっている。桃源郷（とうげんきょう）とまではいかないが、ひなびた集落が広がっている。

鉄橋を渡った先に祖母谷温泉はあった。平屋のプレハブ造りの建物である。右方の河原が源泉となっている。勢いよく湯が湧き出し、火山性ガスの臭いがする。
川は豊かな水量を誇りながら、手ですくって飲みたいほど澄ん

でいる。中に手を入れてみると、冷たくて気持ちがいい。川上の方を見ると、砂防ダムが見え、流れ落ちる水が涼しい響きを立てている。

雲行きが怪しいので、とりあえず、欅平に戻ることにした。駅に着くと、にわかに本降りとなった。ここから黒部ダムまでは、徒歩で十一時間かかるとのこと。徒歩ではなく、工事用のトロッコ電車やエレベーター、専用鉄道、トロリーバスなどを乗り継いで、トンネル内を移動する方法もあるのだが、事前に関西電力に申し込んでおく必要がある。

宇奈月温泉に戻ってきた。日暮れまで時間があるので、旧山彦橋へ行ってみた。赤く塗られた鉄橋で、以前、黒部峡谷鉄道が使

っていたものである。新山彦橋が出来たので、線路はそちらに移り、こちらは遊歩道として整備されたのである。
古い橋の方が低い位置に架かっているわけだが、色といい。大きさといい、兄弟のようにそっくりである。トロッコ列車がトンネルから出てきて、新山彦橋を渡るところが、撮影場所としてはベストだ。

シャッターを押した。さあ、旧線のトンネルをくぐって進もう。遊歩道は宇奈月ダムに通じている。もし仮に、列車がここを走ってきたら、逃げ道はない！　まあ、そんなことはないのだが、頭の中で空想してみると、背筋がぞくぞくする。現実には柔らかな橙(だいだい)の光が、一定の間隔で照らしているばかり。トンネルを抜け

て車道の上に出ると、もう宇奈月ダムが見える。

宇奈月駅前には、黒部川電気記念館がある。そこでは黒部川の第四ダム（黒四ダム）の建設にまつわる物語が、ビデオで上映されていた。

江戸時代、この辺（あた）りは加賀藩前田氏の領地であり、一般人の立山参り以外は、入山が厳しく制限されていた。見回りの役人は十九日かけて、立山、黒部川流域、信濃（しなの）との国境（くにざかい）を検分していた。信濃側からの木材の盗伐を防ごうとしたらしい。

さびれた民宿に泊まった。客はどうやら、僕一人しかいないようだった。「数日前は何組もお客さんがいたのよ」と女将（おかみ）はぼやいている。襖（ふすま）を開けたら、ゴキブリがつぶれていた。げんなりした。

夕食には富山湾で獲れたホタルイカと白エビが出た。ホタルイ

カは醤油漬、白エビはバター炒めである。大きさは小指くらいあり、肉は甘みがあって軟らかい。桜エビのように丸ごと食べるので、ひげや足がちょっと邪魔になる。富山湾は海底が急に落ち込んでおり、珍しい生き物が多く暮らしているのだ。

新山彦橋

仏石

人喰い岩

黒部川渓流

宇奈月温泉

古いトンネル

立山のふもと室堂へ

翌日、朝食後、すぐにチェックアウト。宇奈月温泉駅から、富山地方鉄道で立山駅へ。ケーブルカーに乗り換える。恐ろしいほどの急勾配(きゅうこうばい)で美女平へ。展望台でちょっと休んだ後、室堂(むろどう)行きのバスに乗り込んだ。

弥陀ヶ原の辺りで称名滝(しょうみょうだき)が見えた。これは高さ三五〇メートルで、日本一の落差を誇るものだという。森林の中を細長い筋のように流れ落ちるさまが、バスの車窓から拝めた。弥陀(みだ)というのは阿弥陀如来(あみだにょらい)で、称名は念仏のこと。立山は霊場なのである。

室堂のバスターミナルに到着したのは、お昼少し過ぎだった。ここ室堂は標高二四五〇メートル。古立山(こたてやま)火山による溶岩台地で

ある。彼方に立山連峰を望む、超絶した見晴らしが眼前に広がる。

ホテル立山のレストランで腹ごしらえ。立山自然保護センターへ行き、ライチョウの生態について説明を受けた。雪の上を純白の姿で歩み、真夏にはウズラのような斑（まだら）の毛に生え替わると、一般には信じられているが、すべての個体に当てはまるわけではない。大きさも三キロの大型から、エゾライチョウなど四〇〇グラムの小ぶりなものまで。

立山周辺に生息するものは、六〇〇グラムぐらい。氷河期の生き残りとされ、地球が温暖化した後は、高地に取り残されたのだという。長い冬を乗り切るために、真冬は集団生活をし、森林の生える地帯まで下りてきて、木の芽などを食べて飢えをしのぐ。

ライチョウは純白な姿が象徴するように、病原菌に対する抵抗力がない。そのため、観光客が鶏卵の殻などを落としていくと、たちまちウイルスに感染してしまう。ニホンオオカミと同じ運命をたどる恐れがあるという。巣はハイマツの陰などに作られる。イギリスでは狩猟の対象にされて絶滅。ヨーロッパの種を放して、生態の回復を目指しているとのこと。

　室堂高原にはハイキングコースが複数あるが、今夜はロッジ立山連峰に泊まるので、みくりが池一周コースをたどることにした。幸い、空は青く澄み渡り、立山連峰は雄山（おやま）から剣岳（つるぎだけ）、奥大日岳までくっきり見える。ところどころ、氷河に削り取られた跡があり、砕けた岩石の散る谷には残雪が覗（のぞ）き、ハイマツや高山植物の茂る

緑が、まだら状の模様になっている。
高原を囲む連峰は、標高三千メートル前後あり、見慣れている甲州あたりの山より、千メートル近く高い。荒涼とした雰囲気は、見渡す人間の身を引き締めてくれるが、太陽光線は非常に強く、顔や腕がひりひりしてくる。
空気が薄いせいか、妙に気分がハイになる。これは富士山でも体験したことである。ランナーズハイと同様に、血中の酸素濃度が低下したことで、エンドルフィンが分泌されているのだろう。
ここは森林が育つ限界よりも上である。ライチョウを育むハイマツが、唯一の例外である。雄山の中腹には山小屋が見えるが、とても手が届かない天上にあるようだ。それでいて、山は目の前にそびえているのである。

遊歩道の両側には、黄色い花びらのミヤマキンバイ（深山金梅）、白んだ紫のタテヤマリンドウ（立山竜胆）などの高山植物が生えている。花々の一部は人に踏まれ、枯れてしまった後に植えられたものである。

みくりが池は旧火口に水がたまったもの。崖にはハイマツが生え、池の端にはまだ雪が残っている。表面はうねるように波立っており、吹きつけた土埃の跡も見える。周辺は真冬に八メートル以上も積雪があるので、真夏のこの時期になっても、冬の面影が消えないというわけ。

橙に茶の斑点が入ったクルマユリ（車百合）を見つけた。それを前面に、バックを池にして写真を撮った。足下の花に目を配っていると、普段なら気にも留めない草の穂に、光が当たっている

のに目を奪われた。

　みくりが池の横から、急な階段を下りて地獄谷に向かう。硫化水素の臭いが漂ってくる。ただでさえ酸素が薄いのに、息が詰まりそうになり、速く歩くのも難しい。立山地獄というのは、『今昔物語』の中に出てくる。都に一番近い地獄として、恐れられていたという。人々の想像力をかき立てるものが、ここ立山には数多くある。

　美しい山並みは神々しさがあり、温泉は病を癒す効能がある。ここ地獄谷は異臭とともに、１メートル以上も湯が噴出し、ぐつぐつ煮えたぎっている所さえある。鳥も虫も寄せつけず、草すらほとんど生えてこない。

ガスの噴出口は硫黄が積み重なって、蟻塚のように塔をなしている。噴き出すガスは時には、ジェットエンジンのような轟音を響かせる。飛行機がなかった当時の人々は、焦熱と異臭ばかりでなく、この恐ろしい音に肝を冷やしたに違いない。

けれども、怖い物見たさに顔を近づけた者は、硫化水素を多く吸って倒れたことだろう。人が死ぬのを見て育まれる想像力は、地獄に対するイメージを膨らませていく。

仏典に説かれた地獄が、ここでは現実のものとして存在する。人々に恐怖を抱かせることで、神仏の住まう浄土、立山へと導き、魂を再生させるのが、この地に根づく信仰だったのである。阿弥陀如来に見立てられたのが、立山連峰の一つ雄山だったが、明治の廃仏毀釈以降は神社が建ち、修験道も勢いを失ってしまった。

地獄谷を過ぎても、硫黄を含んだ湯は谷川を下り、風向きで異臭が吹き上がってくる。日はすでに西に傾き、流れに光の粒を反射させている。ようやく心和(なご)ませる風景に出会った。人生で言えば、すべてをなし終えて余生を楽しむ余裕に似た感覚だ。

ロッジ立山連峰に着いた。ユースホステル風の造りの山小屋である。中はかなりきれいに造ってあるが、もちろん相部屋である。夕食を取ったあと、カメラを持って外に出た。

少し上ったところで、右手には地獄谷に通じる谷川が見える。反対の方に進むと、道は二手に分かれる。一つはみくりが池に通じ、いま一つは下りでキャンプ場に通じている。まだ日が当たっていて、若者や家族連れが色とりどりのテントを広げている。

見る間に日は山際（やまぎわ）に沈んでいき、キャンプ場全体に夕闇が迫っていた。立山連峰はまだ橙の光を浴びている。僕は山がうらやましくなった。道端に咲く草花は、すでに暗がりの中で精彩を欠いている。

ゆっくりと坂道を上っていく。振り返ると、雄山の右に満月が出ていた。雲一つない。日没が近いのでまだ白い光を放たず、もう一つの地球みたいに、透き通る青さをしている。

雄山は残光を浴びて、橙に燃え上がっていく。見る間に赤紫に変わり、次第に色あせていった。人々は息を呑んで眺めており、しばし光の寸劇に見とれていた。

入浴した後、ジャンパーを着て外に出た。月は白く輝いていた。

そのせいで、天の川は目にできなかったが、北斗七星はくっきり見えた。九時に消灯だというので、名残を惜しんで山小屋に戻った。

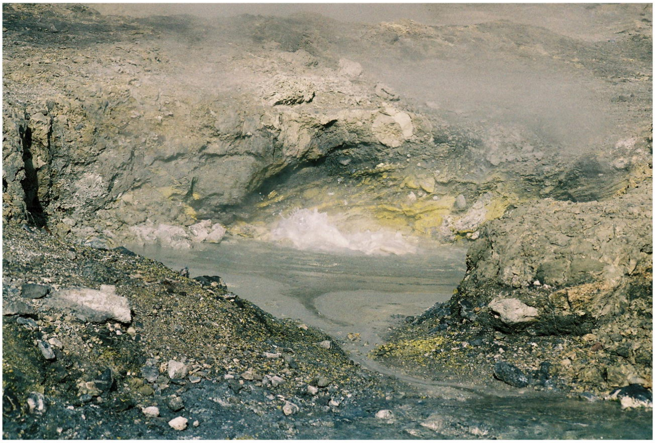
雄山

みくりが池

クルマユリ

地獄谷

噴気



沸騰する温泉

谷川と光

立山と月①

立山と月②

雄山に登る

朝七時半にロッジ立山連峰を出た。地獄谷を覗きに行くと、たちまち息苦しくなった。硫化水素が多く出ているのか。みくりが池に沿って、谷から離れていくと、ほどなく楽になってきた。血の池地獄というのは、旧火口の一つで、池の底に鉄分が含まれるため、血の色に見えるわけだが、仏典が当てはめたイメージを知らなければ、まがまがしさは感じられない。

雄山の斜面に山崎カールがある。氷河期に山稜が削り取られた窪地で、草の生えた谷間には残雪が覗いている。北側を見下ろすと、富山平野が広がっており、彼方には日本海がかすんで見える。

立山室堂山荘の前まで来た。ここは八代将軍吉宗の享保(きょうほう)年間に

建てられた、日本一古い山小屋である。立山登山のための宿坊のような役目を果たしていたらしい。

　雄山に向かう山道を登っていく。目の前に雪渓（せっけい）が広がっている。真夏に雪を踏みしめるのは、生まれて初めての体験だった。霧がかかってくると、雪の表面を白い冷気が流れていくのが見える。不用意に足を運ぶと、転んでしまいそうになった。しかも、旧式の一眼レフを携（たずさ）えてきたから、重い上に息も弾む。

　一（いち）の越（こし）山荘までは、坂が急できつくても、まだ石畳が続いている分楽だった。その時、ふもとから山荘に向かって、ヘリコプターが上昇してきた。シャッター・スピードを速くして、すかさず撮影する。空中でプロペラの動きが止まったままの、トリックめ

いたヘリコプターが現像されることだろう。

機体から食料品の入った段ボールが下ろされている。作業を眺めながら、山荘で買ったカップラーメンを食べる。時計を見ると、まだ九時十五分。時間には余裕があると思ったが、それからの行程がきつかった。崩れやすい岩石ばかりの道なき道が続いていく。岩の上に赤いペンキで、矢印が書いてあるだけなのだ。足場の悪い所を踏むと、ずるずると小石が下に落ちていく。重い荷物を背負っているから、体のバランスを崩しただけで、崖から一気にあの世に転落である。

そんな危ない崖でも、美しい花々が咲いていたり、岩の上に野鳥が留まっていたりすると、カメラの窓枠を通して、自分だけの世界を切り取りたくなる。

山を下りてくる人たちと擦れ違う時には、重い荷物を下ろしてゆっくり休むことにする。人がいなくなると、また登り始める。レモン水を飲みながら、下界を見下ろすのは最高だ！

三千メートル近い標高なので、空気は薄く、ふっと浮き上がるような気分である。はずんでいた呼吸も整い、大きく息を吸うと、快感が指先まで広がっていく。ナチュラルハイという奴だ。

ほとんど四つんばいになって、雄山の山頂にたどり着いた。すでに十一時を回っていた。一休みしたところで、社務所で立山曼荼羅（まんだら）のしおりを買う。神々の住まう山並みと、八大地獄の広がる地獄谷、救いの手を差し伸べる地蔵菩薩（じぞうぼさつ）と、極楽へ導く阿弥陀如来。神仏分離以降、雄山神社から仏教色は除かれたが、ここは本来、神仏混淆（こんこう）の修験の山だったのだ。

前方右に十メートルほど高い所があり、岩場の先に祠（ほこら）ほどの大きさの、可愛くて素朴な社（やしろ）が建っている。太鼓の音が響いてくる……。鳥居をくぐると、社の前で神主（かんぬし）さんが祝詞（のりと）を上げてくださる。

三千メートルの薄い空気の中、祝詞の声が朗々と響く。太鼓の鈍い響きが鼓動のように伝わってくる。空はあくまでも澄んでいる。お祓（はら）いしていただき、神道式に柏手（かしわで）を二回打つ。御神酒（おみき）を一口ずつ飲む。命をかけて登ってきただけに、余計有難みを感じる。

社の脇からは、黒部湖のクリームがかった湖水が見える。冷たい色である。渇水のせいで水位が下がり、茶色い岩肌が帯状に見える。

血の池

室堂山荘

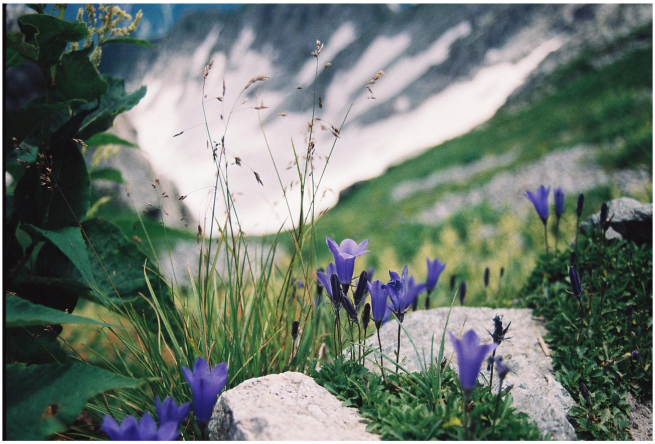
雪渓

ヘリコプター

野鳥

もうすぐ山頂

雄山神社



リンドウ

黒部湖を見下ろす

立山黒部アルペンルート

雄山を下山すると、早くも午後二時になっていた。喫茶店でカレーライスを掻(か)き込んで、遅い昼食。ゆっくりしている時間はない。高原の風景を目にすることなく、地下のバス発着場へと急行した。丸一日見てきた素晴らしい世界は、はっきりと脳裏に刻まれている。もはや未練はない……。

立山黒部アルペンルートで、信濃大町へと出るのである。二時半発の臨時便に乗車した。トロリーバスが一九七〇年前後に消えたのは、架線が消火活動の妨(さまた)げになるからということだった。架線はあってもレールはなく、高速で規定のルートを走る点で、バスと電車の中間をいくような乗り物だが、排気ガスがなく電気で

動くため、地下深くを走る交通機関としては、無公害でかつ、最適である。雄山の真下をひた走り、左折して大観峰の駅に出る。

ここは崖上のロープウェイの駅である。下方に黒部湖が見えるが、湖面が手の届きそうなほど近づいた。すし詰め状態で下りていき、黒部平でケーブルカーに乗り換える。これは大部分がトンネルで、黒部湖駅も地下にある。

改札を出てベンチに座っていると、中国人の旅行者が通り過ぎた。ふと看板を見ると、今日最後の遊覧船が五分後に出港するようだ。地下道を走り、地上に出たとき、乗船を促すアナウンスが聞こえた。切符を買って階段を駆け下りた。

ヨット風の造りの船で、三十分の遊覧が楽しめる。湖上を進んでいくと少しは涼しいが、室堂と比べると、千メートルも標高が

低い。ひんやりした緊張が懐かしい。とはいえ、湖水は十度前後というから、転落した場合は命にかかわる。

遊覧船は五キロほどさかのぼり、Uターンして戻ってきた。船着き場に帰る途中、逆光の中に雄山の頂がかすみ、目がくらんだ。ロープウェイの大観峰駅も見えたが、懐かしさはあっても、もはや感動はしない。登山した折の張り詰めた感覚と比べたら。

下船した後、黒部ダムの上を歩く。黒部川第四発電所が取水している関係で、黒四ダムと呼ばれることもある。ダムからは膨大な放水がされている。下流の水を涸らすわけにはいかないからだ。二つの大きな口から、怒号とともに水の束が噴き出し、辺りに水煙をまき散らしている。その恐ろしい圧力は、凹形のコンクリート壁にかかる水圧のごく一部でしかない。

時計を見た。トロリーバスが出る時刻である。トンネル内にある黒部ダム駅へ向かった。トロリーバスに飛び乗る。これは立山のトンネルよりも長い。地上に抜けて坂道を抜けると扇沢。もう長野県である。路線バスに乗り換え、三十分も経たぬうちに大町温泉郷に着いた。

黒部湖

旅の終わりはミュージアム

温泉で旅の疲れを癒した。翌朝、大町温泉郷にあるヘンリー・ミラー博物館に入った。ミラーは大胆な性描写と、シュルレアリスムを思わせる形式にとらわれない筆致で知られる作家だが、多くの絵画も残しており、子どもが描くような、素朴なタッチが特徴である。

神による創造は光から始まったと、旧約聖書は伝えているが、ミラーの場合は、気の向くままに好きな色を塗っていき、それが形をなしていくといった感じである。形が定まる直前に、ミラーは筆を擱(お)いているのだろうか。最後に何を描き込むか、というミラーの思いが伝わってくる。

次に入ったのは、酒の博物館だった。酒の醸造過程が、詳しく説明されている。清酒が誕生する以前の日本の酒は、いわゆるどぶろくで、現在のものよりアルコール度が低かった。非常な大酒飲みが存在したのは、そのためであり、現代人より酒に強かったわけではない。

日本のアルコール消費量が低めなのは、アルコール分解酵素を持たない人の割合が高い、ということが関係している。アジア人では日本人と中国人に下戸（げこ）が多く、韓国人にはうわばみが多い。ちなみに、アルコール消費量世界一は、フランス人であるという。水の代わりにワインを飲んでいる、と言われるほどだから。

バスに乗って信濃大町駅に出た。最後に入ったのは、大町山岳

博物館である。一階は登山の歴史で、山岳信仰から近現代の登山への変遷。二階は哺乳類（ほにゅうるい）、鳥類、昆虫の剥製（はくせい）。ニホンザル、タヌキ、キツネ、猛禽類の物が多かった。三階の展望台からは、晴れていても雲が多く、山並みはかすんで見えない。付属の動物園には、けがをした病気の動物が収容されている。ライチョウ、フクロウなどは見えたが、他の動物は檻の陰に隠れている。

　十三時十六分発の特急あずさに乗り込む。黒部峡谷、室堂、立山、アルペンルートの旅は終わった。

あとがき

黒部峡谷、立山を巡ったのは、僕がまだ三十代の頃だった。当時はもっぱら一人旅をしていて、買って間もない一眼レフを担（かつ）いで、意気揚々と出かけていった。黒部峡谷、室堂、立山の自然は、期待に十分に応えてくれた。北海道以外でも、これほど美しい山や川、草花、空があるというのは驚きだった。

紀行というものは、本来、文章の質だけで勝負するものだと思うのだが、素人（しろうと）ながらも、自己満足できる写真が撮れたので、恥を顧みずに載せてみることにした。

最後に、旅行の日程を記しておく。

（二〇〇一年）

七月三十日　池袋発。

七月三十一日　黒部峡谷鉄道に乗り欅平へ。宇奈月泊。

八月一日　室堂、地獄谷を巡り、ロッジ立山連峰泊。

八月二日　雄山登山。アルペンルート。大町温泉郷泊。

八月三日　美術館、博物館見学。帰宅。

髙野敦志

二〇一四年九月二日

今回の改版では、リフローではなく固定レイアウトに改め、それぞれの写真に説明を加えた。

二〇二四年十月十四日

髙野敦志